



竹中 尚文 様

お坊さんとケアマネさん



差出人 木村 晃子

竹中 尚文 様

すっかり、ご無沙汰をしておりました。お盆も過ぎて、北海道は、朝晩涼しくなりました。早くも秋を感じています。気がつけば9月もすぐそこです。

ご無沙汰していた理由は、ただ一つです。4月に仕事の配属先が変わり、私の仕事の量がずいぶんと増えたことで、なかなか時間に余裕がなくなっていました。振り返ると、4月から6月までは、ほとんど休む間もなく、仕事に追われる日々でした。それでも、終わらない仕事如山積みになっていくのです。今振り返っても、仕事以外に自分が何をしていたか、記憶がありません。記憶がないのではなく、仕事以外には何もしていなかったのだと思います。

無我夢中の毎日で、心も体も停止寸前のところまで駆使していました。エンジンストップの危機を回避できたことは良かったと思っています。これまでの人生の中で、初めて「過労死」という言葉を身近に感じた時期でした。「頑張り過ぎるな。」「無理をするな。」と言葉をかけてもらっても、最低限のマスト事項が

進まず、何としても仕事を片付けなくてはならない、という思いの一心でした。今思うとゾッとします。幸いに、一緒に暮らす娘たちの心配があって、我に返ることができました。何をすることも、体が資本であることは言うまでもありません。体を壊さずに生きていることが大事だと痛感しています。

配属が変わったと言っても、仕事の内容としては、軸の部分では変わりません。ただ、これまでは、担当するケースを、最大35名として、地域に暮らす高齢者の自宅での生活を支援してきましたが、今は、ケースの支援だけではなくなりました。地域包括支援センターという機関は、介護サービスを利用する高齢者の担当だけでなく、地域の高齢者に関する総合相談（なんでも相談）の窓口になっているので、担当ケース以外にも、地域から寄せられる相談ごとに、日々対応していくことが重要な仕事なのです。

寄せられた相談については、自分たちの機関だけで対応していくことができる場合の他、関係機関（主に高齢者の支援機関）や、領域違いの分野（高齢者支援以外の機関）との連携をしながら対応していくことが必要な場合があります。連携先は実に多数あるのです。連携先のそれぞれには、その機関や、分野、組織によって独自のルール（いわゆる業界ルールのもの）があります。このような、独自のルールや価値観が相手先には存在しているということを理解しつつ連携をとることの難しさを感じています。

何につけても、「変化」を嫌う傾向の人は多くいます。自分たちのルールと違うことをされては、拒否反応がでてしまう場合もあります。「変化」というのは、人が生きていく上での必然とも思いますが、一方で、普遍的なこともあります。どうしたら、人間関係や、仕事上の連携ということに、互いのルールの主張ではなく、折り合いをみつけながら協力しあっていくということがうまくできるのでしょうか。最近の悩みは、専らこのあたりのことでした。

「みんなちがって みんないい」は、金子みすゞ の有名な詩の一節ですが、現実社会では、それほど、世の中は多様性を認めていないのではないのでしょうか。色々な人が存在しながら、生きていくために、或いは同じ目的のために協力しあっていくために、私たちは何を心得ておくと良いのでしょうか。

この時期になると、今はもうお亡くなりになられた戦争体験者の方のお話を思い出します。シベリア抑留された方の体験談。特攻隊だった方の体験談。その時には、「国のために戦うこと」が唯一絶対の価値観だったこと。すさまじい環境での体験が、戦争を二度と起こしてはいけないことだという価値観に変化したことを語られていたことを思い出します。昭和20年の終戦から、日本は戦争をしない国と変化しました。その変化によって平和が維持されてきました。これからも、この平和が保たれるように、「変えてはならぬもの」があるように思います。

変わること、変わらないこと、変えること、変えてはならないこと。刻々と流れる時間の中で、人と人が競い合わずに生きていくことができれば良いと思っています。仕事の中で、暮らしの中で・・・

少々お疲れモードな毎日でしたので、お手紙が遠のきました。そちらは、まだまだ暑い日が続くことと思います。どうぞ、ご自愛ください。

木村 晃子

2017年8月

2017年8月20日

木村 晃子 様

竹中尚文

拝復

木村さんは忙しかったのですね。少し、心配していました。でも、いっしょに暮らす娘さん達がブレーキを掛けてくれた様子で、いい存在ですね。

こちらは、まだまだ酷暑です。田圃で農作業をする人たちも、さすがに日中は昼寝をしています。昨日、大阪の梅田(JR 大阪駅周辺の地名)で都会の中に作られた庭園(ミ二田圃や畑)で、午後2時頃に農作業をしている人たちがいました。

「死ぬぞ!」と思いました。おそらく9時5時で仕事をしているのでしょうが、通常ではない仕事の時間と言えます。私の知っている農作業の夏の通常の間は朝5時から10時までと午後5時から7時までだと思います。「通常」というのは、状況や当事者によってコロコロ変わるものなのでしょうね。

木村さんの仕事の変化は、ご自分の仕事をしてきた世界と他の世界の調整がかなりあるようですね。自分の世界の住人はその世界だけで生きているのではなく、他の世界との関わりを持つことになりますね。そこで、誰かがその調整をしなくてはなりませんね。いわば国と国の関係調整をするようなものでしょうか。国が違えば、言葉が違いますね。社会の成り立ちも違うからルールも異なりますね。でも、同じ人間が暮らしているのだから、無関係ではられない。そうすると誰かが関係がスムーズにいくように調整しなければなりませんね。私たちが暮らしているこの社会は、何気なく暮らしていますが、いつも誰かがそうやって調整をしてくれているのですね。木村さん、ご苦労さまです。

私たち宗教者は、いつも誰かに自分が遇った素晴らしい教えを伝えねばならないという責務を負った職業だと思います。布教というのは、大航海時代の宣教師だけのものではなく、すべての宗教者の務めだと思います。当然、私も親鸞聖人の教えを人々に伝えねばならないのですが、私の導きで親鸞聖人の教えに出遭った人はいません。かつては、「あなたは違う、本当はこうだ」というような私の言動があったかもしれませんが。今はというと、あきらめたものではありませんが、私の力で人は変えられないと思っています。たとえ人が変わっていても、それは私の力ではないのです。私の力で変えられるのは自分だけだと思います。それすら難しいものですが。あきらめたのではないと申しましたが、それは相手が何を言っているのか、どんな人であるのかを理解すべきであると思っています。自分との違いは何なのか、それは私が歩み寄れる相違であるのかと考えるべ

きだと思っています。それが私にとってあきらめないということです。

木村さんのような立場だと、そこにはクライアントというような人がいらっしゃると思います。クライアントの意向があるから折衝が始まるのでしょう。簡単に、そうかそうかといってクライアントの不利益になる結果にしてしまうわけにもいかないでしょう。でも、クライアントの利益は私のルールの中でだけ保証されるとは限らないでしょう。他者のルールの中でもクライアントの利益が見いだせたら、任せてみてもいいかもしれません。

私の友人の失恋話をしましょう。ずいぶんと昔のことです。友人には結婚を考えていた恋人がいました。彼女はその友人に、自分は他の人と結婚をしたいので別れてくれるようにいいました。友人は自分と結婚をした方が彼女は幸せになると思いました。いくら考えても彼女が他の人と結婚をしてもうまくいくはずがないと考えました。しかし、友人は彼女の決断を受け入れるしかないので。典型的な失恋です。友人は、自分を見つめ直すいい機会になったのだらうと思います。だから今の彼はとてもいい人生を歩んでいるように見えます。いつの時代も失恋は人を育てるものだと思いますが、失恋を勝負に負けたと考える人がいるそうです。そのような理解には人の変化もありませんし、新たな世界を知る機会も失われるでしょう。

仕事でも勝ち負けと考えて、負けないための手立てに専念する人たちもいます。負けないけれど、変化はありません。エラーを恐れる人に改革者はいません。変化を望まないようにする仕事に明日はないでしょう。今日の繰り返しです。そのような変化を望まない人と共有の事態を抱えたときに、困ってしまいますね。私も変化するし、あなたも変化をする、そこに誰も知らない明日があるように思います。但し、それは私の期待を裏切る明日であるかもしれないと覚悟しておかねばなりません。

今年はどんな秋になるのでしょうか。多雨の夏の後に来る秋はどんな秋なのでしょう。農作物の不作が心配されますが、季節の移ろいを楽しみに待ちましょう。どうぞお元気で。

合掌